

## Y4-33

### 岩手宮城内陸地震における医療救護班活動の報告

盛岡赤十字病院 脳神経外科  
○久保 直彦

平成20年6月14日の岩手宮城内陸地震における日赤岩手県支部および盛岡赤十字病院の医療救護活動の概要と事後検討された課題を報告する。今回発生した地震は震度6強、M7.2の規模であったが、幸い震源地が山間部であったため、人的被害は最小であった。

【地震発災から医療救護班出発まで】発災（8時43分）直後より、当院では救護班の結成、医療機材の準備を行った。県支部では土曜日と他の行事により職員不在であったが、9時30分対策本部を立ち上げ、10時に救護班待機要請、11時23分一関に派遣要請あり。12時に病院を出発した。

【現地での活動内容】一関市内は被害がなく、都市機能、医療機関も正常であった。要請で孤立した地域からヘリ搬送されてくる被災者の救護を担当した。ヘリポートの温泉旅館駐車場とヘリポートと避難所になっている小学校で活動した。被災者の健康チェックから始まり、傷病者を随時治療した。医療対象となったのは計16名、内科系9名、外科系5名、その他2名であった。その他の活動として避難所の衛生環境、担当保健師と医療体制の打ち合わせ、避難民への毛布や安眠セットの追加配布を行った。

【撤退】市内の医療機関が正常に動いていること、人的被害の拡大が見込まれず、避難所に保健師、救急車が常時待機していることより、23時20分救護班の撤収を決定した。

【反省点】1 発災地の県支部の体制：発災直後、スタッフが少なく県防災会議からを含め情報収集不足であり、待機命令、出動命令、物資補給に時間がなかった。

2 災害拠点病院としての体制：DMATや赤十字訓練経験者のみで医療救護班を結成し得なかった。情報が少なく、医療資機材、持参薬品の選定、事前の資材準備状況、救急車内の物資の固定にも問題が指摘された。今回の反省をふまえた今後の急性期医療救護活動の課題について報告する。

## Y4-34

### 災害救護活動のロジを担う事務系職員等を対象とした研修の取り組みについて

日本赤十字社京都府支部<sup>1)</sup>、  
京都第一赤十字病院 社会課<sup>2)</sup>  
○美濃 秀隆<sup>1)</sup>、上門 充<sup>2)</sup>

【目的】京都府支部では、医療救護活動を支えるべきロジスティクス部門の教育訓練が医療従事者を対象とした種々の研修プログラムに比べて充実に劣るとの認識に立ち

- (1) 病院等の事務系職員の災害救護に関する基礎的能力と災害救護に対する意識の高揚
- (2) 災害時におけるロジスティクスの重要性の再認識
- (3) 施設職員と支部、並びにボランティアスタッフとの協働活動の強化

を目的に、平成18年度から事務系職員を対象とした救護研修会を開催してきたので今後の展望も含めてその概要を報告する。

【実施回数】4回

【参加対象】支部職員、病院等施設の事務系職員、防災ボランティア（特殊救護要員登録者等）

【内容】災害救護概論・食糧自活要領・救護機材の基本操作・救急車の操作・一次救命処置・無線通信・除染用装備品類操作・緊急走行要領など。

また、当支部の京都第一赤十字病院は、基幹災害医療センターの指定を受けており、府内のDMATチーム等に対する研修訓練の役割も担っている。平成18年度の基幹災害医療センター研修会からロジ部門の研修指導については、この事務系職員救護研修のプログラムを活用し、一定の成果を得ている。

【結果】アンケート結果から、基本的なことを学ぶことで災害出動に対する不安軽減に大きくつながった、赤十字職員としての使命感が高まった等、所期の目的を一定達成出来たことが確認できた。

【考察】今後は、研修プログラムを基礎編、ステップアップ編、特科研修などに体系化していくことが必要であると考えられる。